

## 研 究

育児への否定的・肯定的感情と  
ソーシャル・サポートとの関連

—ひとり親・ふたり親の比較から—

荒 牧 美佐子<sup>1)</sup>

## 〔論文要旨〕

首都圏在住の未就学児を持つ母親を対象に育児への否定的感情・肯定的感情とソーシャル・サポートとの関連について質問紙調査を実施した（有効回答830票，回収率33.4%）。先行研究と同様，夫からのサポートが多い母親は，育児への否定的感情が低く，肯定的感情が高いことが明らかになった。また，ひとり親・ふたり親とでは，否定的感情・肯定的感情の高さに差は見られなかった。そこで，ふたり親のうち夫サポートLow群とHigh群，夫サポートのないひとり親群の3群で比較した結果，もっとも否定的感情が高く，肯定的感情の低かったのは，夫サポートLow群であった。このことから，夫からのサポートが期待できる状況においては，サポートが得られないことが母親の不満・負担につながっていることが示唆された。

**Key words :** 育児負担感, 育児不安感, 育児肯定感, ソーシャル・サポート, single mother, 夫の育児参加

## I. はじめに

育児不安や育児ストレス等の育児への否定的感情に関するこれまでの研究では，主に対象者を母親とし，その夫（父親）からのサポートとの関連に焦点を当てたものが多い。これらに共通して，父親の育児参加度の高さと，母親の育児への否定的感情の低さとの関連が指摘されている<sup>1)~3)</sup>。また，夫婦関係が良好であることが母親の育児不安，育児ストレスを軽減することを明らかにした研究も多い<sup>4)~8)</sup>。しかし，父親からのサポートに限定すると，父親のいないひとり親家庭のケースについて考察できない。主にふたり親を対象とした，これまでの育児不

安・育児ストレス研究では，ひとり親の場合について十分に明らかにされてこなかった。と同時に，ふたり親のケースとの比較もほとんどなされてない。父親のサポートが母親の育児不安を軽減するうえで重要な働きをなすのであれば，父親のいないひとり親家庭の母親の場合にはどうなのかを明らかにする必要がある。

また，子どもが幼稚園や保育園に入園することで，園の先生や子どもを通じた新たな友人からも新たなサポートが得られるようになるなど，親子の成長・発達とともにサポート環境は変化していくと考えられる。よって，育児不安・育児ストレスとの関連において，父親のサポート以外についても分析すべきだろう。

The Relationships among Child-Rearing Anxiety, Affirmative Feeling for Child-Rearing, and Social Support : A Comparison between Single and Married Mothers

[1660]

Misako ARAMAKI

受付 04. 9.24

採用 05. 8.30

1) お茶の水女子大学大学院人間文化研究科（博士課程）

別刷請求先：荒牧美佐子 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程

〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1

Tel/Fax : 03-5978-5782

さらに、以上のような育児に対する否定的感情とは数多くの研究が積み重ねられてきた半面で、育児への肯定的感情に関する研究はまだ少ない<sup>9)10)</sup>。その背景には、こうした否定的・肯定的感情とは一元的なものとして捉えられてきたことなどがあると考えられる。しかし、実際の子育て場面において親は、自分の子どもをかわいいと感じたり、子育ては有意義なことであると肯定的に捉えたりする一方で、時として子どもをどう育てたらよいかわからなくなるなどの不安を抱えるなど、育児に対する肯定的・否定的感情をあわせ持つものだと考える。すなわち、住田<sup>4)</sup>の指摘するように、両者は完全に一元的なものではなく、むしろ別次元の感情であるといえ、本研究では、育児への否定的感情のみならず、肯定的な側面についても注目する。また、ソーシャル・サポートとの関連において、これらが育児への否定的感情を軽減するとするならば、肯定的感情を高める働きを持つことも予測される。そこで、育児への否定的・肯定的感情の両側面とサポートとの関連について明らかにする。

以上のことを踏まえ、本研究では、母親の持つ育児への否定的・肯定的感情とサポートに関し、これまでなされてこなかったひとり親・ふたり親の比較を行うことを主たる目的とする。それぞれどういった育児サポートを得ているのかを明らかにしつつ、特に先行研究よりその重要性が指摘されている父親からのサポートとの関連において、両群の育児否定的・肯定的感情の差について明らかにする。

## II. 調査方法

### 1. 対象

首都圏に在住の未就学児（年齢0～6歳）を持つ母親830名が対象。うち769名がふたり親家庭、61名がひとり親家庭である。

### 2. 方法

電話帳に記載された連絡先に問い合わせ、協力の了承を得た保育園15園、幼稚園6園を通じて、計2,481名の母親に質問紙を配布した。回収は、園の都合に合わせた形で行い、うち8園では個別の郵送による回収、13園では園を通し

て実施した。なお回収率については、郵送（33.1%）、園を通じて（38.1%）であり、回収法による回収率の差、また、幼稚園・保育園による差はなかった。調査時期は2002年7～9月、2003年7～9月。有効回収数は830票。

分析には、統計処理用ソフトSPSS（Windows版）11.5Jを使用した。

### 3. 質問紙の構成

質問紙は、「育児への否定的感情・肯定的感情に関する項目」、「ソーシャル・サポートに関する項目」、「属性に関する項目」の3部構成である。

#### 1) 育児への否定的感情・肯定的感情尺度

住田・中田の育児不安尺度を参考にした<sup>11)</sup>。この尺度は育児不安に関する17項目と育児への肯定的感情を尋ねる5項目の計22項目で構成されている。住田らは「よくある・ときどきある・あまりない」の3件法を採用しているが、論理的に考えて「まったくない」といった回答もあり得ると判断し、本研究では「よくある（4点）」～「全くない（1点）」の4件法とし、得点化した。得点が高いほど、否定的・肯定的感情が高いことを示す。

#### 2) ソーシャル・サポート尺度

サポートは、母親がどのくらいのサポートを受けていると認知しているかを測定する「認知されたサポート」アプローチを採用した。対人的なサポートとして「夫／妻方の親／母親の兄弟・姉妹／友人／幼稚園・保育園の先生」の7種の提供者を設定し、それぞれから、道具的・情緒的サポート（各2項目ずつ）をどのくらい受けているか評定してもらった（「とてもそう（4点）」～「全くそうではない（1点）」）。また、情報サポートとして「育児書／育児雑誌／テレビの育児番組／インターネット上の子育て情報／新聞の育児欄／保健所や児童相談所などの専門機関／市の広報」を設定し、これらからどのくらいの情報を得ているかをたずねた（「とてもしている（4点）」～「全くしていない（1点）」）。

表1 育児への否定的感情項目の因子分析結果 (主因子法・Varimax 回転)

| 項 目 内 容                              | F1    | F2    | h <sup>2</sup> |
|--------------------------------------|-------|-------|----------------|
| 子どもが、わずらわしくてイライラする                   | .72   | .04   | .52            |
| 子どもが自分の言うことを聞かないのでイライラする             | .65   | .22   | .47            |
| 自分の子どもでも、かわいくないと感じる                  | .64   | .10   | .43            |
| 子どもに時間を取られて、自分のやりたいことができず、イライラする     | .58   | .12   | .35            |
| 子どもが汚したり、散らかしたりするので嫌になる              | .57   | .16   | .35            |
| 子どものことを考えるのが面倒になる                    | .54   | .22   | .34            |
| 育児雑誌や育児書と比べて、自分の子どもの発達が遅れているのではないか   | .04   | .79   | .64            |
| 自分が思っているように子どもが成長しないので成長が遅れているのではないか | .19   | .76   | .60            |
| 他の子どもと比べて、自分の子どもの発達が遅れているのではないか      | .09   | .75   | .57            |
| テレビや雑誌・本を見て、自分の育て方でよいのかどうか不安になる      | .21   | .66   | .47            |
| 他のお母さんの育て方と比べて、自分の育て方でよいのかどうか不安になる   | .26   | .63   | .44            |
| 育児のことでどうしたらよいかわからなくなる                | .35   | .51   | .37            |
| 因子寄与                                 | 3.00  | 2.56  |                |
| 寄与率 (%)                              | 24.86 | 21.30 |                |

F1：育児負担感 F2：育児不安感

表2 育児への肯定的感情項目の因子分析結果 (主因子法)

| 項 目 内 容                       | F1    | h <sup>2</sup> |
|-------------------------------|-------|----------------|
| 子どもを育てるのは、楽しいと感じる             | .74   | .55            |
| 子どもを育てることは有意義ですばらしいことだと思う     | .71   | .51            |
| 子どもを育てることによって、自分も成長しているのだと感じる | .54   | .30            |
| 自分の子どもは、思うようにうまく育っていると感じる     | .40   | .16            |
| 因子寄与                          | 1.50  |                |
| 寄与率 (%)                       | 37.54 |                |

F1：育児肯定感

### Ⅲ. 結 果

#### 1. 育児への否定的・肯定的感情の因子分析

830名分の回答データすべてを対象に、育児への否定的・肯定的感情尺度それぞれの因子分析を行った。固有値1.2以上の因子を条件に、主因子法による因子分析を行い、バリマックス回転を実施した。その結果、育児への否定的感情は、2因子構成 (表1)、肯定的感情は1因子構成であることが明らかとなった (表2)。

育児への否定的感情の第1因子は「育児によ

る負担感・束縛感や子どもの行為・態度へのイライラ (以後、「育児負担感」と呼ぶ)」とし、第2因子を「子どもの育ち・育て方への不安感 (以降、「育児不安感」と呼ぶ)」とする。そして、育児への肯定的感情は「子どもを育てることや子どもの存在自体を肯定的に捉える感情 (以降、「育児肯定感」と呼ぶ)」と定義する。信頼性の検定の結果、「育児負担感」は  $\alpha=0.86$ 、「育児不安感」は  $\alpha=0.81$ 、「育児肯定感」は  $\alpha=0.69$  となった。以降の分析では、これらを従属変数として用いる。

表3 対象者の属性

|         | ふたり親<br>(n=769) | ひとり親<br>(n=61) |
|---------|-----------------|----------------|
| 平 均(SD) |                 |                |
| 子どもの数   | 1.9人(0.7)       | 1.6人(0.8)      |
| 末子年齢    | 3.1歳(1.7)       | 3.5歳(1.5)      |
| 母親の年齢   | 34.7歳(4.4)      | 32.4歳(5.3)     |
| 人 数(%)  |                 |                |
| 家族形態    |                 |                |
| 核家族     | 116(84.8)       | 30(50.0)       |
| 拡大家族    | 649(15.2)       | 30(50.0)       |
| 母親の就労形態 |                 |                |
| フルタイム   | 252(33.5)       | 29(47.5)       |
| パートタイム  | 139(18.5)       | 25(41.0)       |
| 専業主婦    | 316(42.0)       | 1( 1.6)        |
| その他     | 46( 6.1)        | 6( 9.8)        |
| 所属園     |                 |                |
| 幼稚園     | 389(50.7)       | 6( 9.8)        |
| 保育園     | 378(49.3)       | 55(90.2)       |

注. 不明除く

2. 対象者の属性

今回の調査対象となった母親の属性について表3に示す。ひとり親とふたり親とでは、家族形態、母親の職業形態、所属園で違いが見られる。

3. 所属園による養育環境の違いについて

本研究では、幼稚園・保育園が混在したデータを用いるが、これらでは親子の置かれた環境や生活スタイルに違いがあると考えられる。よって、ひとり親・ふたり親を比較する前に、こ

れらをまとめて用いるべきかどうかについて分析を行った。

1) 育児への否定的・肯定的感情の差

まず、ひとり親・ふたり親群を、所属園との関連から、「幼×ふたり親群」、「保×ふたり親群」、「保×ひとり親群」の3群に分け、育児への否定的・肯定的感情に差があるか分析した(表4)。幼稚園に所属するひとり親家庭については、6ケースと少数であったため、分析から除外した。その結果、育児負担感 ( $F(2,785)=8.56$   $p<0.001$ )、肯定感 ( $F(2,785)=3.48$   $p<0.05$ ) に差があった。Tukey法による多重比較の結果、所属園によってのみ差が見られ、幼稚園群は、保育園群よりも負担感が高く肯定感が低いことが分かった。

2) 夫からのサポートとの関連

続いて、父親(夫)からのサポートと育児への否定的・肯定的感情との関連について明らかにすべく、夫からのサポート得点上位25%を「夫サポートHigh群」、下位25%を「夫サポートLow群」に分け、所属園と掛け合わせたうえ、4群での比較を行った(表5)。育児負担感 ( $F(3,318)=6.9$   $p<0.001$ )、肯定感 ( $F(3,318)=12.12$   $p<0.001$ ) で有意差が認められた。多重比較の結果、負担感が高く肯定感の低い幼稚園群でも、夫からのサポートが多い群では、負担感は低く肯定感が高いことが明らかになった。

以上の結果から、育児への否定的・肯定的感情は、幼稚園・保育園の違いそのものよりも、父親のサポートとの方がより関連が大きいと考えられる。ひとり親・ふたり親の育児への否定的・肯定的感情について、主に父親のサポートとの関連から明らかにしていくという本研究の

表4 負担感・不安感・肯定感を従属変数とした一元配置の分散分析並びに多重比較の結果  
所属園×家族形態の違いについて

|       | 1. 幼×ふたり親群<br>(n=366) | 2. 保×ふたり親群<br>(n=369) | 3. 保×ひとり親群<br>(n=53) |               |
|-------|-----------------------|-----------------------|----------------------|---------------|
| 育児負担感 | 2, 3<1                | 17.6(3.3)             | 16.7(3.3)            | 16.4(2.8) *** |
| 育児不安感 |                       | 12.3(3.4)             | 12.2(3.6)            | 11.8(3.5) ns  |
| 育児肯定感 | 1<2                   | 12.6(2.0)             | 12.9(1.9)            | 12.8(1.9) *   |

注. \* $p<0.05$ , \*\*\* $p<0.001$ , ( ) 内は標準偏差。

表5 負担感・不安感・肯定感を従属変数とした一元配置の分散分析並びに多重比較の結果  
所属園×夫からのサポートの多さとの関連について

|               | 1. 幼×夫 High 群<br>(n=57) | 2. 幼×夫 Low 群<br>(n=92) | 3. 保×夫 High 群<br>(n=96) | 4. 保×夫 Low 群<br>(n=77) |     |
|---------------|-------------------------|------------------------|-------------------------|------------------------|-----|
| 育児負担感 3<2     | 17.4(3.6)               | 18.3(3.6)              | 16.0(3.6)               | 17.4(3.6)              | *** |
| 育児不安感         | 11.7(3.3)               | 12.7(3.5)              | 11.3(4.0)               | 12.1(3.8)              | ns  |
| 育児肯定感 2,4<1,3 | 13.1(1.8)               | 12.0(2.2)              | 13.5(1.8)               | 12.1(2.1)              | *** |

注. \*\*\* $p<0.001$ , ( ) 内は標準偏差.

目的と照らし合わせ, 以降, 幼稚園・保育園群をまとめて分析することに問題はないとした。

#### 4. ひとり親・ふたり親の比較

##### 1) 育児への否定的・肯定的感情

すでに表4において示したとおり, ひとり親・ふたり親の違いによって, 育児への否定的・肯定的感情に差は見られなかった。

##### 2) 育児に関するソーシャル・サポート

まず, 夫や妻方の親などから受ける「対人的なサポート」について, 各群のサポート得点の平均値を図1に示した(ただし, 夫からのサポートについては, ふたり親群のみ)。両群でt検定を行った結果, 有意な差が見られたのは, 妻方の親からのサポート量のみであり, ひとり親群の方が多かった。(t=4.0, df=773,  $p<0.001$ )。続いて「情報サポート」のサポート得点の平均値は図2に示した。ふたり親群の方が有意に多いことが明らかになった。

##### 3) サポートと育児への否定的・肯定的感情との関連 (ふたり親の場合)

ふたり親群について, 対人的並びに情報サポートと育児への否定的・肯定的感情との単純相関を算出し, 複数のサポートとの間に関連が

あることを確認したうえで, サポート変数を独立変数, 育児負担感などを従属変数とした重回帰分析を行った(表6)。その結果, 育児負担感を従属変数とした場合 ( $F(6,586)=6.61$ ,  $p<0.001$ ), 夫や園の先生からのサポートが他のサポートとの関連よりも大きいことがわかった。育児不安感では, 夫からのサポートに加え, 情報サポートとの関連が大きい ( $F(6,588)=12.01$ ,  $p<0.001$ )。育児肯定感では, 夫, 園の先生, さらに友人からのサポートとの間に正の相関関係が見られた ( $F(6,588)=13.01$ ,  $p<0.001$ )。以上, 夫からのサポートは, 育児負担感・不安感と負の相関関係, 肯定感とは正の相関関係にあり, いずれとも関連があることが明らかになった。

##### 〈ひとり親の場合〉

ひとり親の場合についても, サポートと負担感・不安感・肯定感との単純相関を算出した(表7)。その結果, 育児負担感と関連があったのは, 兄弟姉妹からのサポートのみ ( $p<0.01$ )であり, 育児肯定感では, 同じく兄弟姉妹サポート ( $p<0.05$ )と園の先生からのサポートだけだった ( $p<0.05$ )。育児不安感については, どのサポートとも関連が見られなかったので,

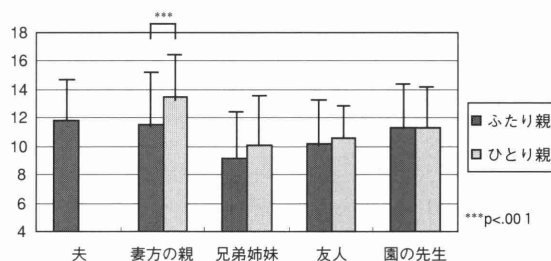


図1 対人的サポート比較

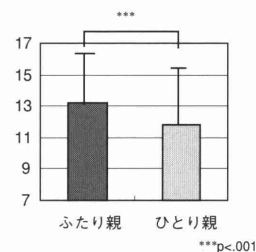


図2 情報サポート比較

表6 サポートを従属変数とした重回帰分析(ふたり親群)  
標準回帰係数(β)と相関係数(γ)

|                | 育児負担感<br>(n=593) |         | 育児不安感<br>(n=595) |         | 育児肯定感<br>(n=595) |        |
|----------------|------------------|---------|------------------|---------|------------------|--------|
|                | β                | γ       | β                | γ       | β                | γ      |
| 夫              | -0.18***         | -0.18** | -0.16***         | -0.10** | 0.25***          | 0.27** |
| 妻方の親           | 0.04             | -0.09   | 0.04             | 0.01    | 0.03             | 0.10*  |
| 兄弟姉妹           | -0.07            | -0.07*  | -0.05            | -0.01   | 0.02             | 0.13** |
| 友人             | 0.01             | -0.03   | -0.05            | 0.01    | 0.10*            | 0.12** |
| 園の先生           | -0.14**          | -0.18** | 0.01             | -0.02   | 0.12**           | 0.22** |
| 情報             | 0.03             | -0.10   | 0.31***          | 0.30**  | 0.02             | 0.10*  |
| R              | 0.25             |         | 0.33             |         | 0.34             |        |
| R <sup>2</sup> | 0.06***          |         | 0.11***          |         | 0.12***          |        |

注. \*p<0.05, \*\*p<0.01

表7 サポートと負担感・不安感・肯定感の単純相関(ひとり親群)

|       | 妻方の親  | 兄弟姉妹    | 友人    | 園の先生  | 情報   |
|-------|-------|---------|-------|-------|------|
| 育児負担感 | -0.14 | -0.51** | -0.15 | -0.15 | 0.15 |
| 育児不安感 | -0.03 | -0.05   | -0.01 | 0.13  | 0.34 |
| 育児肯定感 | 0.07  | 0.32*   | 0.26  | 0.35* | 0.23 |

注. \*p<0.05, \*\*p<0.01

ひとり親群での重回帰分析は行わなかった。

4) 夫サポートについてのふたり親・ひとり親群での比較

以上の結果から、ふたり親・ひとり親とで、育児への否定的・肯定的感情に差がなかったことと、ふたり親群では主に夫からのサポートが、そしてひとり親群では兄弟姉妹からのサポートが重要であることが明らかとなった。ただし、ふたり親群では重要と思われる夫サポートは、

ひとり親群では、当然のことであるが、その関連をみることはできない。そこで最後に、夫サポートに関してひとり親群とふたり親群とで比較を行うべく、ふたり親群を、夫からのサポート得点上位25%の「夫サポート High 群」、下位25%の「夫サポート Low 群」に、そしてひとり親群を「夫サポートなし群」として、負担感・不安感・肯定感を従属変数とした一元配置の分散分析を行った(表8)。その結果、負担感・

表8 負担感・不安感・肯定感を従属変数とした一元配置の分散分析並びに多重比較の結果  
ひとり親・ふたり親群の比較

|              | 1. 夫なし群<br>(n=59) | 2. 夫 Low 群<br>(n=175) | 3. 夫 High 群<br>(n=159) |     |
|--------------|-------------------|-----------------------|------------------------|-----|
| 育児負担感 1, 3<2 | 16.5(2.8)         | 17.9(3.7)             | 16.3(3.4)              | *** |
| 育児不安感 3<2    | 11.7(3.3)         | 12.5(3.7)             | 11.4(3.7)              | *   |
| 育児肯定感 2<1, 3 | 12.7(1.8)         | 12.0(2.2)             | 13.4(1.9)              | *** |

注. \*p<0.05, \*\*\*p<0.001, ( ) 内は標準偏差。

不安感・肯定感のすべてで有意差が見られた。Tukey法による多重比較の結果、負担感、夫なし群・サポートHigh群の方がサポートLow群よりも有意に低く、肯定感、反対にサポートLow群がもっとも低いことがわかった。

#### IV. 考 察

##### 1. ひとり親・ふたり親群でのサポート比較

まず、ふたり親群については先行研究の指摘どおり、夫からのサポートの重要性が確認された。これは負担感・不安感といった否定的感情のみならず、肯定感についても同様であった。しかし、不安感、夫より情報サポートとの関連が大きく、しかもサポートが多いほど不安感が高いという結果となった。これについては、氾濫する育児情報に振り回されることにより不安感が高まる、あるいは、不安感が高いがゆえにより多くの情報を求めようとしているという2つの可能性が考えられる。ただ横断調査である今回の分析では、その因果まで断言できないので、今後明らかにしていく必要がある。一方、ひとり親群では、情報サポートと不安感との間に関連が見られなかった。ひとり親・ふたり親でこのような差があったのは、図2にも示したように、ふたり親群の方が、もともと得ているサポート量が多いためと考えられる。ひとり親群の母親は、ほぼ全員が有職者であることから、情報を得る時間を確保すること自体が難しいのかもしれない。あるいは、ふたり親よりも育児に限らず、生活全般に関する負担が重い分だけ、子育て情報を得る余裕がないといった状況も考えられる。

また、ひとり親群において従属変数と関連が見られたのは、兄弟姉妹からのサポートだけであった。サポートの多さ自体はふたり親・ひとり親との間に有意差がないので、ひとり親にとっては、兄弟姉妹サポートはかなり頼りになるものであることが窺える。同じ肉親ということで、友人などよりも気安く子どもの面倒などを頼める相手であるのかもしれない。しかし同じ肉親であっても、妻方の親からのサポートは、ひとり親・ふたり親のいずれでも、否定的・肯定的感情との関連は見られなかった。ひとり親群の方がふたり親群よりも祖父母との同居率が

高く(表1)、サポートも多い(図1)が、こうした差によらず、妻方の親からのサポートが、育児への否定的・肯定的感情と関連がないのはなぜなのか。

その理由のひとつに、妻方の親から得るサポートとは、母親にとっていわば“当たり前”になっていることが考えられないだろうか。助けてもらえるのは“当たり前”だからこそ、母親の育児負担感や不安感などを軽減する効果を持っていないのかもしれない。遠距離に住んでいるなどの理由により、サポートがままならないときにでも、そばに住んでさえいれば、サポートしてもらえるはずだという前提のもと、サポートの多い・少ないが直接母親の心理的な問題と結びつかないものと考ええる。すなわち「サポートを受けていない」イコール「サポートしてもらえない」ではないために、サポートが得られないことへの葛藤が生じないのだろう。しかし、これまでの先行研究の中には、祖父母を初めとした家族からのサポートが母親の育児不安やストレスを緩和・軽減する効果について指摘しているものもあり<sup>12)13)</sup>、こういった状況下にあると、夫以外の家族からのサポートが効果的なのかについて今後さらなる検討が必要である。

##### 2. 夫のサポートはなくてはならないものか?

すでに述べたように、ふたり親については、夫からのサポートと育児への否定的・肯定的感情との関連が明らかとなった。今回設定した他のサポートと比較しても、いわばオールマイティのように、どの従属変数とも関連が見られた。となれば、夫のサポートさえあれば、育児への否定的感情は緩和され、肯定感が高められるといえるだろうか。仮にそうだとすると、夫からのサポートを全く得られないひとり親は、それを得られる状況にあるふたり親の場合よりも、負担感や不安感が高いのか。また、肯定感は低いのか。しかし、分析の結果として、ひとり親・ふたり親の間に、負担感・不安感・肯定感の高さの違いはなかった(表4)。また、表8の結果から、夫がいてもサポートしてもらえていないと考える母親は、サポートが多い母親やひとり親よりも負担感が高く、肯定感が低いことが

明らかになった。このことから、夫のサポートに対して初めから期待していない群（ひとり親群）よりも、夫がいるにも関わらず、サポートを得ることができない群（サポート Low 群）の方が、育児に対する心理的な負荷が高いことが示された。すなわち、母親がサポートを得られると期待できる状況下では、それが得られないことが、かえって負担となり、結果的に、育児への負担感・不安感も高まるといえそうである。

以上のことから、育児への負担感、不安感、肯定感との関連においては、夫からのサポートは、それがただ単に“ある”のか“ない”のかで、是非を論じるべきではないといえる。

## VI. 今後の課題

今回の調査では、主にひとり親・ふたり親による比較を行ったが、育児への肯定的・否定的感情と関連している要因としては、こうした家族形態以外にも、母親の職業形態や子どもの年齢・数なども考えられる。特に幼稚園・保育園の違いによって、こうした条件は異なってくる。今回、幼稚園群の方が、保育園群よりも負担感が高く、肯定感が低いという結果が得られたが、夫からのサポートという要因以外についても、今後分析を進めていきたい。

また、今後は、ひとり親群に関し、兄弟姉妹以外のサポートについても、どんなサポートが効果的であるかを明らかにするとともに、ただ単に、サポートが多ければ良いのかどうかという量的な側面だけでなく、どういう状況で得られると効果的であるのかといったサポートの質的な側面についても、追究していく。

## 謝 辞

本論文をまとめるにあたり、統計を含めた草稿全体の構成について、白梅学園大学の無藤隆教授にご校閲いただきましたことを、心より感謝申し上げます。

## 文 献

- 1) 牧野カツコ. 働く母親と育児不安. 家庭教育研究所紀要 1983; 4: 67-76.
- 2) 越 良子, 坪田雄二. 母親の育児不安と父親の育児強力との関連. 広島大学教育学部紀要第1部 1991; 39: 181-185.
- 3) 芳賀 道. 母親の育児ストレスに対する父親のソーシャル・サポートの緩衝効果について. 中央大学大学院研究年報 2001; 30: 211-218.
- 4) 住田正樹. 母親の育児不安と夫婦関係. 子ども社会研究 1999; 5: 3-20.
- 5) Crnic, Keith., Low, Christine. Everyday stresses and parenting. Bornstein, Marc H. (Ed), Handbook of parenting. Vol. 5: Practical issues in parenting (2nd ed.), 243-267. Mahwah, NJ, US 2002: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
- 6) Webster-Stratton, Carolyn. Stress: A potential disruptor of parent perceptions and family interactions. Journal of Clinical Child Psychology 1990; 19: 302-312.
- 7) 数井みゆき, 無藤 隆, 園田菜摘. 子どもの発達と母子関係・夫婦関係: 幼児を持つ家族について. 発達心理学研究 1996; 7(1): 31-40.
- 8) 小泉智恵, 菅原ますみ, 前川暁子, 他. 働く母親における仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバーが抑うつ傾向に及ぼす影響. 発達心理学研究 2003; 14(3): 257-271.
- 9) 大藪 泰, 前田忠彦. 乳児をもつ母親の育児満足感の形成要因Ⅰ—4か月児と10か月児の母親の比較—. 小児保健研究 1994; 53(6): 826-834.
- 10) 大藪 泰, 前田忠彦. 乳児をもつ母親の育児満足感の形成要因Ⅲ—父親の仕事中心志向と家庭中心志向の効果—. 小児保健研究, 1997; 56(1): 54-60.
- 11) 住田正樹, 中田周作. 父親の育児態度と母親の育児不安. 九州大学大学院教育学研究紀要 1999; 2: 19-98.
- 12) Melson, Gail.F., Windecker-Nelson. Erizabeth. and Schwarz, Roza. Support and Stress in Mothers and Fathers of Young Children. Early Education & Development, 1998; 9(3): 261-281.
- 13) 酒井 厚, 松本聡子. 育児環境における母子関係の研究(4)—常勤とパートタイマーによる子育てストレスを緩和するソーシャル・サポートの比較—. 日本発達心理学会第13回大会発表論文集 2002: 84.